

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：24301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720051

研究課題名(和文) 抽象化における「構成」概念の萌芽 シュトゥットガルト美術アカデミーを中心に

研究課題名(英文) The Beginning of Construction in the Development of Abstraction: Focusing on the Stuttgart Art Academy

研究代表者

青木 加苗 (AOKI, Kanae)

京都市立芸術大学・美術学部・客員研究員

研究者番号：70573905

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、アドルフ・ヘルツェルの造形について、その理論と実作品の双方から検証し、画面の抽象化が「構成」という概念に支えられて展開してゆくことを検証した。その際、色彩の効果が画面内での重心を左右するものとして位置づけられるが、ヘルツェルはこれによって対象を分解することなく、画面を一つの世界として直接構築しようとした。この意識は、調和的あるいは全体性を強く示す世界観の顕れとして位置づけられるが、ヨハネス・イッテンやオスカー・シュレンマーを通じて、具体的にバウハウスに引き継がれてゆく造形観として認めることができるのである。

研究成果の概要(英文)：In this research, Adolf Hoelzel's art is examined from both sides of his theory and actual works, and it is proved that his way of abstraction develops based on the concept of construction. On that occasion, the effect of color is considered to be what determines the balance or the center of the gravity in the picture, which he tries directly to build up the picture as a fulfilled world of image, not by resolving or breaking up the object into elements. Such sense of form and color conveys his view of the world that strongly shows his concept of harmony and totality. It is the very concept that his students like Johannes Itten and Oskar Schlemmer later bring to the Bauhaus.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学/美学・美術史

キーワード：アドルフ・ヘルツェル バウハウス ヨハネス・イッテン オスカー・シュレンマー 新ダッハウ派  
シュトゥットガルト美術アカデミー 色彩論 画面構成

### 1. 研究開始当初の背景

本研究で取り上げたアドルフ・ヘルツェル (Adolf Hoelzel: 1853-1934) は、シュトゥットガルト美術アカデミーで教鞭を執った人物である。絵画理論や色彩論に長け、その門下生には、のちにバウハウスで活動するヨハネス・イッテン (Johannes Itten: 1888-1967) やオスカー・シュレンマー (Oskar Schlemmer: 1888-1943) がいた。本研究は、彼らを通してバウハウスへと流入したヘルツェルの造形観に、その根底的な重要性を認め、光を当てようとするものである。

研究者がヘルツェルの重要性に辿り着いたのは、これまで行ってきたシュレンマーの初期絵画作品についての研究を通じて、ヘルツェルに学んだ時代のシュトゥットガルトでの活動が、シュレンマーにとっての極めて重要な造形観の形成期であったことが明らかとなったからである。シュレンマーの造形は、具体的な人間形象をモチーフとしていることもあり、理知的な構成観に基づく造形と捉えられがちなバウハウスにおいては一見、特異な存在にも思われるのであるが、実際はその根底に横たわる人間観や世界に対する視点、そして造形についての基本的な態度において、シュレンマーが与えた影響は少なくなかった。そのことを認めるならば、シュレンマーを通して伝えられた、その師ヘルツェルの造形理論について明らかにし、バウハウスとの関係性について目を向けねばならないだろう。

またイッテンを通して、ヘルツェルの造形観はバウハウスへとつながっている。それはイッテンの色彩理論が、ヘルツェルのそれに直接的に拠るものだからである。周知の通りイッテンの色彩理論はバウハウスの基本的な造形理論の形成に大きな影響を与え、むしろ初期バウハウスの造形観をイッテンが形成したと言っても過言ではない。よってヘルツェルの色彩理論は門下生であったイッテンによる色彩理論の原形として位置づけることが出来よう。

しかしながらヘルツェルの造形には、具体的な色彩理論の他に、構成という概念が重要な位置を占めている。極めて表面的に見れば、イッテンがバウハウスで行った、過去の芸術作品の画面構成を検証し、自身の構成的能力を高める教育内容 (巨匠絵画の分析) もヘルツェルが行っていたことであり、直接的な着想源として位置づけることもできる。しかしヘルツェル自身の絵画制作に踏み込んでみれば、画面に描かれる対象を抽象的な形態へと還元して行く作業の中にこそ、基本形態による構成概念が生まれていることが明らかなのである。これは最初期の抽象絵画の形成としても注目すべき事柄であるが、本研究で扱うバウハウスとの関係性に限ったとしても、基礎形態と抽象、そして構成の概念として、見逃すことの出来ない事実となる。

以上のように本研究の背景には、バウハウ

スに流れ込んだ造形観の原形として、複数の重要な経路からヘルツェルの存在が見え隠れしていることがある。これまでヘルツェルの存在は、積極的にバウハウス前史として取り上げられて来なかったが、バウハウスの活動からおおよそ1世紀が近づく今、求められる再検討の糸口となると考える。

### 2. 研究の目的

本研究は、ヘルツェルからバウハウスへとつながる造形観を明らかにするものであるが、そのキーワードとなるのが、「構成」の概念である。

20世紀初頭ヨーロッパの数あるモダニズム運動の中で、「構成」という概念が一つの大きな役割を果たしたことは言うまでもない。さまざまなスタイルがあるものの、画面や造形の抽象化を経た先で、線や面、色彩といった基本的な造形要素を頼りに行われる作業であるとされるのは共通する。しかし20世紀初頭のシュトゥットガルトにおいては、本研究で取り上げるヘルツェルを中心としたグループで、全く異なった過程によって構成的概念が生まれていた。それは抽象化と構成が不可分な形で、互いに形成されてゆくというものである。

本研究題目に「抽象化における「構成」概念の萌芽」と記したのは、研究者がその新たな概念が発生する端緒をヘルツェルに認めるからである。ヘルツェルによる抽象化の方法論を探り、それが後にバウハウスの中へと組み込まれて行くことを明らかにすることで、ヘルツェルの造形における意義が、一つの例外的事例では終わらず、汎用的な意義を持っていたものであることを明らかにしたい。またこの事実を目を向けることは、広くモダニズム芸術の中に認められる「構成」概念の発生経緯を、改めて問い直すことにもつながると考えるのである。

具体的に明らかにすべき課題は、ヘルツェルの造形理論における構成的概念の発生とその実践を明らかにすることと、それがヘルツェルの門下生らによってどのように受容されたかを示すことである。まず造形理論については、これまで色彩理論と画面構成理論が区別して捉えられてきた。研究者は、この色彩理論だけを取り出して論じるのではなく、むしろ色彩の諸要素 (色価や明度対比) を造形要素の一つとすることで、画面構成とそれによる対象の抽象化を検討することが可能となると考える。それによってヘルツェルの造形理論を、一貫した視点のもとで明らかにする。そしてヘルツェルの門下生の中からバウハウスの教授陣として迎え入れられたイッテンやシュレンマーらの造形理論がバウハウスの中でどのような形として位置づけられていったのかを問う。

### 3. 研究の方法

まず初年度に行ったのはヘルツェルの画面構成理論と色彩理論を明らかにすることである。画面構成理論については、およそ1900年からの10年間に雑誌の記事として数本の論考が出版され、基本的な形が出来上がっている。これを詳細に検討し、実際の作品と照らしあわせた。

一方、色彩理論については、ヘルツェルが自然科学分野の色彩研究者との強い結びつきを持ち、当時、芸術分野の色彩論者として主要な位置づけをされていたことから、雑誌に掲載された論文や自身による講演録などを手掛かりに検証した。

二年目はヘルツェルを中心としたアカデミー学生らのグループと、その形成に寄与したと考えられる当時のシュトゥットガルトの美術状況について検討した。この学生グループは、彼らが展覧会を機に命名したヘルツェル・クライス、すなわちヘルツェル・サークルと呼ばれている。彼らの中からは当時の前衛的な芸術家が多く生まれ、そのうちの何人かがバウハウスに関わり、その芸術的方向性をも左右するほど、重要な役割を果たすことになった。よってこのヘルツェル・サークルとはいかなるものであったのかを明らかにすることが、学生らの活動とその成果を考える上では、基礎となるべき検討項目となった。

最終年度となる三年目には、ヘルツェルの色彩理論を今一度手掛かりに、調和と全体性の概念として、直接バウハウスへとつながる視点を探った。具体的に取り上げたヘルツェルの色彩理論に関するテキストは、自身による講演録や、ダッハウ時代の学生との書簡、またシュトゥットガルト時代の学生であったヨハネス・イッテンが記した「ヘルツェルとその周辺」展カタログ内のテキストである。これらを手掛かりに、実際の作品上での色彩の扱いと画面の抽象化が進む過程を相互に検証した。

これらの検証作業を行う材料を得るため、5回に分けて、現地での調査を行った。主な調査先は、アードルフ・ヘルツェル財団やシュトゥットガルト美術館および併設するヴィリ・パウマイスター資料館、シュトゥットガルト州立美術館と併設のアードルフ・ヘルツェル資料館などである。それぞれにおいて完成作品だけでなく、書簡やスケッチブック、未公開資料などを調査した。その他、現地での研究状況を確認し、関連研究者との意見交換を行うため、シュトゥットガルト、ミュンヘン、ダッハウ、レーゲンスブルク、ウィーンなどの各地を訪れた。

#### 4. 研究成果

今回ヘルツェルの造形理論を検証したことで、抽象化の出発点は主にダッハウにおいて展開された風景画の画面構成、つまりコンポジションについての理論展開であることが明らかになった。それが次第に造形の構成

要素へと分解され、画面の平面性への意識が強まってくるとともに、コンストラクションへの意識へと移行し始めている。その際、閉じた所与の画面という意識は、失われることはない。これはシュレンマーの造形観にも強く伝えられてゆく要素でもある。このことを理論の変化と作品での展開の中に確認した。

またヘルツェルの色彩理論に目を向ければ、ゲーテに集約される中世以来の色彩論から、シニャックに代表される新印象主義やシュヴルールの同時対比理論、さらにはヘルムホルツやフォン・ベツォルトらの自然科学的観察による視点が多数取り込まれていることがわかる。しかしながら最も強く意識されているのは、閉じた円環と調和の概念であり、ヨーロッパにおける伝統的な世界観に基づくものであると言えるだろう。ただし、その理論の実践においては、画面構成作業の一環として、主に画面内のバランスを左右する要素の扱いとして用いられてゆく。結論として簡潔に述べるなら、画面という閉じた空間の中で、簡略化した対象の形態と、画面内での重心を左右する色彩のコントロールによって、対象を分解することなく一つの世界として直接構築してゆくというものである。この「対象を分解しない」という方法は、一般的な「構成」の作業とは異なるものであり、その背景には調和的、あるいは全体性を強く示す世界観が存在するのである。これは、ヨハネス・イッテンやオスカー・シュレンマーの理論や作品の中に明らかに見出すことができるものであり、具体的にバウハウスに引き継がれてゆく造形観であることを示すこととなった。

加えてヘルツェルとバウハウスの関係性として、新たな可能性として示唆できる事実も明らかにできた。それは二年目に行ったヘルツェル・サークルについての検討によるものであるが、このサークルの形成には、当時のシュトゥットガルトという都市の環境が、大きな影響を与えたと言える。というのはこの時代、芸術家グループは数多く生まれていたとはいえ、ヘルツェル・サークルはアカデミー教員と弟子によるグループであり、つまり師弟関係にあるグループが「サークル」として位置づけられるのは、異例というべき事象であろう。つまりそこには他の自主的な芸術グループとは異なる、何らかの生成要因があったと考えられた。それを研究者は、シュトゥットガルトという都市環境に求め、当時の美術界の状況と、ヘルツェルと学生らが与えられた環境を検討することで明らかにしたが、学校というシステムに見る芸術家集団が互いに創造性を高め合うグループは、バウハウスへと直接的につながる活動イメージとも考えられるのではないだろうか。バウハウスにおける徒弟・師弟関係の根幹には工房制があるが、イッテンらの思い描く環境の中には、シュトゥットガルトでの経験が少なからずあったようにも思われるのである。

最後に、成果としてかたちに残すには至らなかったが、今後検討すべき数多くの材料を入手した。ダッハウを中心としたヘルツェルの初期の活動は、数多く生まれていた芸術家コロニーの一つとしても注目すべきものであり、そこで芽生えた造形観を、さらに詳細に検証してゆく必要はある。また他の門下生による資料や作品は、数多く回った各地の美術館などで現物調査することが出来、今後さらにヘルツェルの造形と比較検討する材料として得ることが出来た。加えてヘルツェルの遺品からは、日本美術に関するものがいくつか散見された。これらの影響については、研究者の今後の調査が、現地でも求められている。日本美術に見る造形観の中に、形態の簡略化やシルエット化など、抽象化へとつながる具体的な手段を、ヘルツェルが見出していた可能性は高い。研究者がこれから継続して取り組む課題として報告する

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

青木 加苗、ヘルツェルからバウハウスへ 色彩理論に見る調和と全体性の概念、京都市立芸術大学美術学部研究紀要、査読有、第58号、2014、pp.19-26

青木 加苗、1900年代初頭のシュトゥットガルトと「ヘルツェル・サークル」、京都市立芸術大学美術学部研究紀要、査読有、第57号、2013、pp.19-26

青木 加苗、アードルフ・ヘルツェルの画面構成理論について、京都市立芸術大学美術学部研究紀要、査読有、第56号、2012、pp.39-46

〔学会発表〕(計1件)

青木 加苗、アードルフ・ヘルツェルの色彩理論とその位置づけについて、美学会西部会第287回研究発表会、2012年3月10日、於 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

青木 加苗 (AOKI, Kanae)

京都市立芸術大学・美術学部・客員研究員

研究者番号：70573905

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：